

発行所〓社会通信社 発行人〓滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299―5367

郵便振替 〓〇〇一〇〇―九―五八四三一 労金〓中央労金本店No.1154163

〈もくじ〉

■巻頭言■

貧困も格差もない社会へ

原 野人… 2

今日の根本問題と解決への道

『資本論』第一巻発刊150年を迎えて 中澤 秀行… 3

―向坂逸郎著『資本論入門』と向坂逸郎訳『資本論』記念版―

要員が足りない！職場点検を強め、要員増を 国労上野反合研… 7

―長時間労働の是正、要員増に向けた闘いをつくるために―

トランプ・バブル 編集部… 8

―はじけるのはいつ？―

『旬刊 社会通信』発刊のころ 滝野 忠… 10

―社会通信の四十年(三)―

読者からのおたより …… 12

旬刊 社会通信

NO.1231

二〇一七年一月一日号

二〇一七年一月一日発行
(毎月一日・二五日二回発行)

貧 困 も 格 差 も な い 社 会 へ

今日の根本問題と解決への道

所得格差の根本は資本家（資本の所有者と経営者）の利得や報酬と労働者の賃金の違いである。東京新聞（2016年11月21日）は次のように報ずる。

「所得格差の象徴は、社長と社員の給料の違いだ。世界には年間100億円を超える報酬をもらう経営者がいる。米国の大企業ではトップと一般従業員の報酬の差は約300倍に達している。1970年代には20倍だった。自社株による報酬などが増え、90年代に100倍を超え、そして現在のようになった。……」

日本では、上場企業の従業員平均給与は600万円ほど。役員報酬ははっきりしないが、米国に比べれば格差は少ない。1億円以上は開示義務があり、その該当者は約500人で年々増えている」。日本の格差も米国を追って拡大しているはずである。

資本家階級、中でも独占資本家階級の所得が激増する中で、日本の労働者家計の可処分所得が97年のピーク時に比べて年間84万円減っている。これこそが今日の格差と貧困問題の根本である。しかも資本主義的蓄積は、労働者の側に多くの失業者と、非正規という名の多大な半失業者群とを、産業予備軍として必ず生み抱える。

木を見て森を見ない俗流評論家は、中間層の没落や賃金水準中位の労働者の二極化こそが格差の主因だとする。民衆のいら立ちや怒りをあらぬ方向に向け、移民や外国こそが労働者の敵だと思わせる。

失業や半失業は、資本主義の存続にとって不可欠な産業予備軍である。いずれの資本主義国でも大量に生じている問題であつて、移民を禁じても解消する問題ではない。格差のとてつもない拡大も、グローバル化も新自由主義も資本主義の問題である。貧困も資本主義の問題である。今日の犯罪は元をよく見ると、資本主義がもたらしている。資本による労働者のいじめがある限り、子供の世界のいじめもなくならない。資本主義を乗り越えるべき社会主義政党をもって、階級的労働者の闘いを進めることができない国では、労働者の意識は資本主義的メディアによって日常的に教育され、ゆがめられ、危険な芽が育つ。

産業予備軍を資本蓄積の大きさと均衡させる法則は労働者を資本に釘づけにする。それは資本の蓄積に対応する貧困の蓄積を必ず生む。一極における富の蓄積は、その対極における貧困、労働苦、奴隷状態、無知の蓄積となること、それを脱するには物質的生産諸条件を労働者自身の協同的所有に移すことが不可欠であることはマルクスによって明確にされている。

この目標を明確に持つ者こそが、直面する様々な課題にも果敢に立ち向かうことができる。この目標を持つ政党を、労働組合や市民とともに闘いと学習の中で育てることが不可欠であり、飛躍的成長のための基礎作りが急がれる。

（原 野人）

『資本論』第一巻発刊150年を迎えて

― 向坂逸郎著『資本論入門』と向坂逸郎訳『資本論』記念版 ―

(一) はじめに

向坂逸郎著『資本論入門』（岩波新書）の第34刷が発行され（2016年5月20日付）、大きな書店の書棚に並んでいるのを目にします。

その帯には、「不朽の名著を読み解く 今こそマルクス！」と書かれています。一つ前の33刷の発行は2009年4月21日、こちらの帯には、「泰斗が遺した格好の入門書」と記されています。この二つの帯の表示は、真実が書かれていると確信するとともに、多くの人に、「じっくりと」読んでもらい、更に次に進み、『資本論』そのものにもぜひ挑戦して欲しいと切望するものです。

『資本論』それは、平和を希求し、地上から「豊富の中の貧困」や、増え続ける「失業者や半失業者」を無くし、拡大の一途にある「格差の解消」を望み、文字通り「揺りかごから墓場まで」安心して暮らせる社会の実現を目指す人々、すなわち、真実に世直しを切望する人達にとつては、「座右の書」であります。生涯付き合える、次世代に引き継がれなくてはならぬ、そして、無限のアイデアを提供してくれる書籍であります。

(二) 『資本論入門』は『資本論』記念版の解題です

今年（2017年）は『資本論』第一巻刊行150年です。ちょうど50年前には、刊行100年記念として、岩波書店より向坂逸郎先生による『資本論』の二回目の訳稿が、記念版全4冊として刊行されました。

そして、『資本論入門』（岩波新書）の書かれた経緯については、記念版の「訳者まえがき」『資本論』百年を迎えるに当たって」には、次のように記されています。

「私は、この版には、解題を書くことをしなかった。いまでは私自身『マルクス経済学の方法』（岩波書店）や『マルクス伝』（新潮社）を書いているし、また岩波新書で『資本論入門』を書くので、これらを参照していただければありがたい。ことに最後の『資本論入門』は、『資本論』の記念版とともに、私自身のささやかな『資本論』百年の記念のつもりである。」（『資本論』岩波書店記念版第一巻 VI 頁）と。

そんな訳ですから、『資本論入門』は向坂先生自身の『資本論』百年の記念」として書かれたのですが、『資本論』記念版の「解題」でもあります。加えて、『マルクス経済学の方法』や『マルクス伝』といった、『資本論』の解題（これ以上ないと言える解題でしょう！）を既に書いているのだから、これらをぜひ読んで欲しい！とも言っているのだと思います。事実、これらの著作は、そして『マルクス経済学の方法』の元本とも言える『経済学方法論』（河出書房版全三冊、社会主義協会版合版）は、『資本論』理解の必読書だと思います。

(三) まずは『資本論入門』を読みましょう！

記念版の「訳者まえがき」には、「私は、『資本論』が、労働者、農民、学生、学者、知識階級一般の座右にそなえられることを、希望しつつけてきた。そして、それがマルクスという偉大な天才の志でもあった。」とあり、『資本論』は、必ずしもやさしい本ではない。しかし、額に汗して働く人々には、必ず分る本である。いわば、彼ら自身の自伝であるからである。」とも述べられています。働く者にとつての「自伝」だと言う訳ですが、「必ずしもやさしい本ではない。」とも言われます。「必ずしもやさしい本ではない。」というのは、向坂先生ほどの人だから言えるのだと思います。

それこそ凡庸そのものである私にとつては、『資本論』はとつつきにくく、難解な本でした。記念版全4冊購入からちょうど40年、文庫版全9冊購入から39年も経ちますが、今日に至っても、簡単に易しく読める本にはなつた訳では決してありません。しかし「そこらの推理小説より面白い。」と言われた向坂先生の言葉が、なんとなしに分るようにはなりました。

『資本論』に挑戦して挫折した人、持つてはいるものの紐繻くのに躊躇している人、未購入の人等々・・・、まずは『資本論入門』を手にとってみませんか！

『入門』を手にするとき、いつも思い出す本があります。大内兵衛先生の『マルクス・エンゲルス小伝』（岩波新書）です。『小伝』も2013年に版を重ね、街の書店の棚に並んでいるのを見かけます。『小伝』と『入門』を、私には一組の書籍であるようにも感じています。大内先生は、自著『小伝』について、次のように記しています。

「北斎が、鉄斎が、大観が、林が、そして梅原がなぜ富士山を描くのだろうか、富士山が美しい大きな山であるからだろう。スパルゴが、メーリングが、ルフエーブルがなぜマルクスを描くのだろうか、やっぱりマルクスに見どころがあるからだろう。向坂君はマルクス学者であるが、このごろ数年の日子をかけて『マルクス伝』（新潮社）を完成した。……。それで、向坂君の『マルクス伝』をよんだとき、せめてその紹介文を書こうとしたのであるが、この本があまり大冊であるため、ついその原作の十数分の一のダイジェストになってしまった。わたしはこれをわたしよりはるかに忙しい日本の青年諸君にささげる。向坂君の大作のエハガキである。原作の妙味を得ないのは残念である。」（『マルクス・エンゲルス小伝』2頁）と。

そんな訳で『資本論入門』も、「忙しい日本の青年諸君」や「労働者、農民、学生、学者、知識階級一般」に捧げられた、日本のマルクス向坂逸郎先生の筆による『資本論』の「エハガキ」なのだと思っております。

急ぐ必要はありません、この『入門』をゆっくり、じっくり時間を掛けて読んでみると、徐々に『資本論』そのものを極めたい！という気持ちが湧いて来ると思います。

（四）記念版「訳者まえがき」での大切な示唆

このように、『資本論入門』と『資本論』記念版とは、深い関係にあります。記念版は、初版の刊行から50年を経て、歴史科学なり社会科学の書を扱う古書店には、

40年前に私が新刊で購入した時よりも、まったく安い値が付けられて並んでいるのも見かけます。現在岩波文庫版全9分冊で刊行されている新品を揃えるよりも、安く手に入ると思えます。一生樂しめることを考えれば、こうした書籍は安いものです。『資本論』百年を迎えるに当たって」と言う副題のある記念版の「訳者まえがき」は、決して長い文ではありませんが、段落ごとにたいへん興味を惹かれる内容が詰まっていることを感じる昨今です。

まず冒頭で、『資本論』の歴史的意義について、次のように述べられます。

『資本論』は、百年を生きつづけた。そして人類の歴史の存するかぎり生きつづけるであろう。」と、そして『資本論』は、その運命を資本主義社会とともにする「、すなわち『資本論』の意義は、資本主義社会とともに消滅するという考え」があるが、「これは間違い」であるということです。

その理由として「人々は、『資本論』の歴史的社会的分析の方法は、人類のいかなる社会の運動法則の研究にも、指針となることを忘れてはならない。『資本論』は、自然と社会に関する真実の科学書とともに、古くして、つねに新しい本なのである。」からだと続きます。

冒頭のこの箇所には、理論的な幾つもの興味を持ち続けて来ました。この稿に目を通しておられる皆さんも、ぜひ考えて見てほしく思いますが、私はまずは、向坂先生の『経済学方法論』の冒頭の言葉を思い浮かべます。

「人類は二つの世界に住む、自然と社会である、という言葉で、私は、私の学生活のはじめの論文を書きだしたことを覚えている。マルクスの全思想体系を思い浮かべるときほど、この言葉を切実に回想することはない。自然と社会を差別と統一において理解することに、史的唯物論の精髓はつきるといつてよい。人類の全思想史は、この理解のためになされた努力の痕跡であるといっても誇張ではない。マルクスは、この意味では人類の全思想的発展の正系の嫡子である。マルクスの『資本論』における方法も、要するに、この社会と自然との統一的理解のなかにみいだされるほかはないのである。」(協会版3頁)

次に、『経済学方法論』第三編、そして『マルクス経済学の方法』第三章のタイトルである「歴史的・論理的」という方法についてです。

その他、まだまだありますが、これらの中に、『資本論』が、「古くして」、しかし「つねに新しい本」であり続ける理由を見いだすことが出来ると思います。

(五) 記念版を捧げられた人々

「訳者まえがき」には、記念版『資本論』を捧げる人として、まず岩波書店創立者の岩波茂雄さん、そして、三池炭鉱労働組合労働者とその主婦会の皆さんが記されています。

記念版の解題とも言える『資本論入門』にも、同様の想いが込められているでしょう。人は、物を書く時、あるいは講演で物をしゃべる時、一定の、特定された人を想定している様に思います。向坂先生は「三池炭鉱労働組合労働者とその主婦会の皆さん

ん」と言った人達、すなわち、普通に働き生活している人々に、語り掛けるような気持ちでこの『入門』を記したのではないでしょうか。

「あとがき」には『資本論入門』を書いた理由が記されています。

「経済学などという学問を学んだことのない人々に、『資本論』に親近感をもってもらおうというのは、私の永年の希望であった。『資本論』は、ごく少数の専門家のためにのみ、書かれたものではないからである。」と始まり、「この『入門』で、『資本論』が「分る」というわけにはいかぬ。ただ、なんとなしに分ってもらえば幸いである。それから、『資本論』そのものを読んでほんとうに分ってもらいたい。」と締めくくられています。

最後の一節からは、それこそ、向坂先生の真実の気持ち伝わってきます。

(六) おわりに・・・『資本論解説』（新潮社版）より

1956年と言うと60年も前になりますが、向坂先生が新潮社版の『資本論解説』の「まえがき」として書かれたものを讀むと、その新鮮さに誰もが驚くと思います。

それは、昨日も、今日も、明日も、「資本主義的生産方法」による生産が行われ、「資本主義的蓄積の一般法則」が「鉄の必然性」をして貫徹しているからに他なりません。

「学問、知識の修得は、死ぬまで続けるものである。終るところを知らない。大学四年間の講義などというものは、経済学について言うかぎり、大たいにおいて、研究の仕方の初歩の定石を教わるていどのもので、学校を出た後で、勉強をつづけているかどうか、その人の一生の成長を決定する。そして、学問は独学である。いつまでも教師があつて、講義をノートしていればいいというものではなく、自分で本を讀み、自分で考えるものである。学問は、自分の意志をもつて自分の肩の上にある自分の頭で、教わり学ぶものである。今一つ大事なことが、今日の社会にみちている矛盾や不合理と面と向かつて、これをどう解決するか、という問題は、学校から世の中に出てその中で働いて見て、切実なものとなる。自分の金儲けや地位や研究だけを考えて、世の中のことに一切そっぽを向こうとしても、もはや向けない時世になっている。

大学を出た人々の圧倒的多数に、金や地位や安定した一生が保証されているだろうか？どんなに沢山の才能ある芸術家が、生活の不安のために精神をすりへらしているだろうか？どんなに沢山のすぐれた若い学究が、貧しい無理な生活を余儀なくされているだろうか？・・・・」(向坂逸郎編『資本論解説』新潮社 2／3頁)

『資本論』第一巻刊行150年の今年、『資本論入門』と人類の知的遺産の集大成である『資本論』とを座右の書とする人が、一人でも増えることを願ってやみません。

(2016年12月末日 中澤 秀行)

☆おまけ

この二年、長崎市に行く機会があり、『資本論入門』を思い浮かべました。その都度、福砂屋本店でカステラを購入し、楽しみました。又、労働大学専任講師であった故篠藤光行先生から聞いていた「九大経済学部での向坂先生出題の経済原論の試験問題」も思いだしました。『入門』も、信州松本の扉温泉明神館で執筆されました。

要員が足りない！ 職場点検を強め、要員増を

―長時間労働の是正、要員増に向けた闘いをつくるために―

今年の支部大会においては、全代議員から、職場の要員不足・長時間労働・若手のタダ働き等の訴えが相次ぎ、地本書記長の挨拶、支部書記長の集約でもふれられていた。代議員の発言をかかげる。

発言

「要員不足のため、休日出勤で年休消化」（議長挨拶、車掌）、「退職者がいるのに後補充がされない。出勤助勢しないと線路巡視もできないし、残業しないと仕事がまわらない。だから産休・育休・介護が迷惑がられないような状況だ。」（保線）

「みどりの窓口は毎日混雑し、改札は一人での対応が難しく若い人もイライラしている。若い人は勉強会の資料作りで出勤が多く休憩時間にもやっている。」（駅）

「事故があるたび、業務量が増えている。出勤時間が限度近くになり、宿直時に障害があっても対応できない。出勤は本来当たり前ではない。基本給を上げさせるべき。若い人は『できない』と言えないので、労働組合が関わらなくてはいけない」（電気）

「JESS（JR東日本ステーションサービス・駅の委託）に委託されて要員が減り、出勤が多い。一日平均一〇台の車いすがあり、『改札窓口がいつも閉まっている』と苦情も来ている。JESS職場交流会をやり、管区長に要望も出した。」（委託駅）

「仕事量が増え、一七〇件の仕事を三人で担当。他に線開承認もあり、ほぼ毎日出勤。若い人の退職が多い（JR東へ）。これでは職場の展望が見えない。」（貨物）

「要員不足で、省略せざるを得ないことについて会社が目をつぶる。いつ事故があっても不思議ではない。退職者の補充がないから労働強化。できないことは『できない』ということが大事。」（電気）

「若手は出勤と同時にパソコンに電源入れて仕事を始め、出勤オーバーを避けるためか、ジンジャー（出勤管理システム）に打刻した後も仕事している。要員不足で担当エリアの相互助勢になっている。職場はシステム化で我々は技術継承どころか若手に教わらないといけない。会社が若手にやらせているのは数値を見て直すかどうかの判断であり、どのように直すのかは経験がなくてわかっていない。」（保線）

「昨年からA口が遠隔操作で無人になるとともに四徹から三徹に減らされ、何かあると三〇〇m離れているA口に走るのが重労働。客からの苦情も絶えない」（委託駅）
安倍政権も「働き方改革」と称して、長時間労働の是正に取り組むとしているが、一方で残業代ゼロの方向も目指しており、問題の根本的解決にはならない。

長時間労働は強権的労務管理と相まって、労働者を心の病に追い込み、うつ、自死を頻発させていることは、今、メディアが大きく伝えるところである。長時間労働のもっとも大きな原因は、職場の要員が足りないこと、基本給だけでは生活維持ができないことにある。何よりも、労働組合として、長時間労働の是正に取り組みながら、要員増に向けた闘いを組織し、その過程で、労働者意識を高めていく、職場の労働運動を活性化していくが必要だと思う。以下、取り組み方について考えてみた。

方策

一、あり余る業務量に比べ、要員が少ない。だから、
ア、超勤（時間外労働）・休日出勤が多く、年休が取れない。
イ、時間内の仕事量が多すぎて（一人二役三役）、ミスや事故の温床になる。
ウ、新しい仕事を覚えるための教育時間も少なく、若い人は、自宅など「自分の時間」で勉強せざるを得ない。

二、本来は定員増にさせることが必要だが、当面は、定員通り人員が配置されているかどうか点検し、そうでない場合は、定員通りの要員を配置させよう。

ア、現場長と職場の定員数を確認し、定員通り配置されていない場合（欠員状態）は、速やかに決められた要員を確保させよう。

イ、会社は、要員配置基準を複数職場に広げたり（JESS）、信号と営業の兼務や助勤（中小の駅）、助役等の下位職充当（保線）など、その場しのぎの対策をしてくる可能性があるが、それらは本来の解決ではないため、様々な問題が発生する。問題点を点検し、指摘しよう。

ウ、時間外労働や休日出勤には、36協定の制限がある。国労が結んだ協定でなくても、国労組合員には適用されるので、点検・監視が必要である。

エ、タダ働きは、労基法違反（コンプライアンス違反）になる。ジンジャー打刻後の居残り、風呂敷残業はやめさせよう。

オ、マイプロも、労働時間内であることに注意しよう。しかし一方で、本来業務を超勤でやらざるを得ないケースが増えている。この矛盾も問題にしよう。

カ、若い人は過重な「課題」でも「できない」と言えなくなっている。過重業務に対し、皆で、あるいは労働組合で「できない」と言える職場にしよう。

三、定員増にさせるために

ア、仕事量に比べ要員が足りないことをサービス・安全面（車いす扱い等）から追及し、現場長にも共通認識にさせよう。

イ、合理化施策（みどりの窓口廃止、業務委託等）に反対しよう。

ウ、業務の習得は「自分の時間」ではなく、労働時間内で習得できるようにさせよう。

エ、低賃金と超勤・要員不足は往々にして、一体のものである。超勤なしで人間らしい生活ができる賃金、大幅賃上げを獲得しよう。

オ、契約社員などの非正規労働を廃止し、正社員化させよう。

トランプ・バブル

―はじけるのはいつ？―

株価急騰・ドル高 トランプの大統領就任は来年（一七年一月二〇日）だ。政策、実績はなにもない。だが株価は上がり連日、史上最高値を更新し続ける。大統領選一週間前の十一月五日アメリカ株価は一万七八八ドルだった、開票日の十一月十日は一万八八〇七ドル、それ以降連日上げ続け、十二月七日には一万九五四六ドル、十二月一六日は一万九八四三ドルというように。トランプ・バブルである。

開票日、日本株価はトランプ優勢で一千円弱下げた。米国株は上がった。日本と米国の金融資本家の評価と分析は天と地ほどに違った。米国の金融資本家はトランプは

実業家、したがって「三欠く定規」(義理・人情・恥を欠く)であることを熟知する。彼はおれたちを儲けさせてくれるにちがいないとの思惑が、トランプ・バブルである。バブルはアメリカ金利をつきあげる、アメリカで投資した方が儲かると、新興国から資金は引き上げられ、ドルを買う動きが強まる。ドルの全面高、円は一〇〇円台から一挙に一一七円台後半へ急降下が例証だ。為替相場がドル高に振れることは、新興国のドル建て債務をふくれ上げらせ、物価高↓インフレ↓経済停滞、アメリカでは輸出減少の要因になる。

規制の廃止・撤廃 トランプは不動産開発で財をなした。土地は資本主義社会にあつては、もつとも主要な投資、投機の対象である。土地は自然的に限られた財であるからだ。投機者は資本への規制をきらう、とつ払うことに熱中するてつていた競争至上主義者として現れる。結果がすべて、勝てばいいと。

トランプの政策ははつきりしている。かれの断片的な発言からものはつきり見てとれる。トランプはムキダシの資本主義を地で行く人物だ。主要閣僚人事にも示される。

第一は、ありとあらゆる経済と社会領域で資本の手(自由な搾取)を縛っている規制をとつ払い、なくすことだ。土地・不動産、エネルギー開発・生産を資本家が勝手気まま、かつ自由にできるように。金融規制をとつ払い自由に貨幣、債券、企業の売買ができるように。教育・医療の分野では民営化をおし進め、労働の領域では搾取をさらに強められるように。きわめつけが資本の儲けの障害となる環境保護には絶対反対というドラ声である。

二つは大企業、大金持ちへの減税だ。彼は法人税率三五%から二〇%へ引き下げ、所得税は三九・九%から二五%へ。そして相続税は廃止。十年間に六兆ドル減税するという。だれが得するか、トランプはだれのための政治をやるうとしているか。

三つはインフラ(社会資本)投資の異常な拡大への妄想である。鉄道、道路、港湾への投資拡大は、これまた十年間に五五〇〇億ドルという。

それは通商政策にもいえる。自由競争主義者トランプは、なぜTPP、NAFTA(メキシコ・米国・カナダの自由貿易協定)に反対し、廃止だ、見直したとわめきまくるか。米国優位の貿易協定をつくるためである。自動車、鉄鋼、電気機械産業の地位は凋落し、米国製造業の最後の砦である自動車産業でもドイツのフォルクスワーゲン、日本のトヨタ、フランスの日産・ルノーがゼネラルモーターズを追い抜こうとしている。この状況に我慢がならないのだ。ここに「アメリカ第一」の姿が見える。

これらすべてが、トランプが十一月二十一日発表した「就任一〇〇日計画」、「規制(資本の手をしる)に関しては、新たに規制を一つ作るごとに、古い規制を二つ撤廃するルールを定める。これは非常に重要」の実践だ。

米国と中国 トランプが強調する規制は不法移民、不法移住の阻止・摘発強化、イスラム教徒の入国禁止。外交、安全保障政策でも「アメリカ第一」が実践される。

トランプは中国を「最も重要な敵で台頭する敵」と、中国が核心的利益の一つとする「一つの中国」(台湾は中国に主権)に対抗し挑発する。イスラエルの首都はエルサレムとするのはアラブ諸国への挑戦であり、イランとオバマが結んだ核合意反対は

核兵器廃絶を希求する全世界への挑戦である。

中国はたった三十年間の間にGDP十・四兆ドル（日本五兆ドル、米国十七・三兆ドル）の富をつくる世界第二の国となった。人口は十三億人、日本の十倍、米国の四倍だから、これまでの経済発展を続けるには利益・権益確保が課題となる。南シナ海、尖閣をめぐる問題はその一環としてある。

トランプはロシアに親近感もつと伝えられる。ロシアのプーチンは第二次世界大戦後の政治的枠組みの遵守を北方領土では強く主張し、ウクライナでは新秩序を唱える。ロシアは中国と仲がいい。トランプは「アメリカを再び偉大にする」といい、習近平は「中華民族の再興」をいう。世界情勢の一つの注目点である。

実利主義の国 米国はどんな国か。一七世紀以降、封建社会、身分制はいやだと、資本家になることを夢見て、イギリスを中心にヨーロッパの民族が新たに作った国だ。だから、フランクリンに象徴される「節欲、勤労、貨殖、富」、立身出世を求める。だから米国には階級意識はうすい。

アメリカは仏や独に顕著な絶対王政時代に確立された官僚制度、官僚機構もうすい。哲学の分野ではデューイによって代表されるプラグマティズム（実利主義）がすべてである。メディアが伝える「ディール（取引）」である。

官僚制度の穴を埋めるのが、てっていいした論功行賞による政治任用だ。米国では統領が代われば政府高官（四〇五千人といわれる）は、すべて入れ替えられる。おしやべりな評論家庶民は論功行賞を批判する。権力をめざし獲得した権力者には論功行賞は不可欠だ。統領に貢献したのはだれか。だれが金を出したか、だれが敵陣営を切り崩したか、オシャブリこそ人心収らんの第一である。

先日、だれかが仏最高位の勲章「レジオン・ドヌール」を受賞したとの報道があった。この勲章はナポレオンが「おしやぶりによってこそ、人間は引つ張ってゆかれる」との考えでつくった。

矛盾 トランプは公共投資で金をばらまく、減税で税収は減る、ドル高は貿易収支を赤にする。「アメリカ第一」は雇用・産業だけではあるまい。主要閣僚は軍人だらけ。軍人は戦争をするなかで戦争の術を学ぶ、音楽家は楽器をひくことによって、絵師は絵を画くことによって同じだ。

トランプのカードをいまアメリカの投資家はエースだと夢想する。実際はジョーカーとなる可能性はきわめて高い。世界中で大衆の反乱が起きている。トランプはこうして反乱をさらに高める。

『旬刊 社会通信』発刊のころ

― 社会通信の四十年（三） ―

社会通信が「紙」誌からホームページに移行し、二ヶ月がたちました。読者諸氏から「さらにがんばれ」、この嬉しい苦行に突き進むほか道はなさそうです。ホームページは発行日一日、一五日の二〇三日前に掲載してゆきます。

残務整理が一段落した十二月十二日、二組の友人夫婦が来所、「感謝状」を読み上

げ贈呈して下さいました。賞状に無縁、自分というのもおかしいが照れ屋の私、おもはゆさと恥ずかしさがないまぜになったけれど嬉しかった。まさに「感謝」です。

通信一千号（二〇〇七年五月一一・一二合併号）には「祝一〇〇〇号 一九七七年十一月一日創刊 敬意と感謝をこめて 国労音威子府闘争団」と印字された木製の「楯」をお贈りいただいた。今では一千号をはるかに超え、一二三一号にも。楯とこの感謝状は宝物、これから見守ってくれるにちがいありません。感謝状の文面はよく考え練られており、私だけでなく、国労組合員はじめこの四十年ともにたたかった多くの仲間の歩みです。以下、全文を掲げます。

『社会通信』の活動は、限りなく労働者に寄り添い、労働者の運動を報告・応援・激励・交流する活動でありました。

社会主義協会攻撃、ソ連邦の崩壊、総評・社会党の解体、そして全労協・新社会党の結成、国鉄闘争と「社会通信」は読者とともにありました。

そして反戦と平和、自由と民主主義のために闘い続けた歴史でもありました。

三十九年間、一号も欠けることなく、一号も遅れることのないその活動はまさに偉業と言うべきものです。

その偉業を支えたものこそ、全国の「社会通信」読者と「社会通信」に文章を寄稿した活動家の皆さんとの結びつき、信頼関係があつたればこそと感じ入っております。何より瀧野ご夫妻の限らない情熱と岩井章氏のかつての言葉を借りるなら「労働者への愛情」であつたと思います。

誌面から時代の先端「ホームページ開設」と読者の枠を拡張、これまでの活動に一つの区切りをつけるに当たり、全国の読者やこれまで携わってこられたであろう幾多の諸兄の気持ちや言葉を代表させてもらい、ここに労苦を惜しむことなく活動されてきたご夫妻に、心から感謝を申し上げます。

ここに感謝状を贈り永く心に刻むものです。ホームページでの奮闘を祈念申し上げます。二〇一六年二月二日 瀧野夫妻を激励する二組の夫婦の会より

この文は「通信」の三十九年、三年逆上る社会主義協会発行の情報誌『進路』時代のことをあらためて思い起こさせてくれました。

国際労働運動研究協会を退局し、社会主義協会に入局するまでの一年ほどは浪人です。向坂塾で『宣言』『資本論』を学んだり、国労の仲間との学習会、アルバイトの日々でした。そんな私を向坂先生が社会主義協会に放り込んだのです。編集部で『進路』担当が仕事でした。総評は国労反マル生（国鉄への生産性向上運動反対）闘争勝利、春闘の国民春闘（職場を基礎にした反独占・反自民への闘争領域拡大）、スト権奪還スト高揚で、停滞期を脱し「高揚の時来たる」が、雰囲気でした。

当時の記録を振り返ると日経連（独占資本が組織した労働問題を担当する組織、二〇〇二年に経団連に吸収合併された）が一九七〇年代半ば、ロッキード事件と田中角栄（前首相）逮捕など政治的激動と相まって「危機感」をもっていたことが、彼らの発言からみてとれます。

ロッキード事件での田中逮捕直後に開かれた日経連の「軽井沢セミナー」で、桜田氏は、次のように述べておりました。

「……一九三〇年頃、ドイツ・ヒトラー出現前の様な小党分裂に陥ることは議会政治の終焉であることを警戒すべきであります。我々は日本人の優秀性を信じて待つ心算です。ところで政治が混乱している間の日本には安定帯がなければなりません。私は企業の職場を中心とする労資が安定帯となり得ると信じます。昭和二〇年初頭から敗戦後の一兩年間頃に経験したところでもあります。それに警察、裁判所が健全であり所要の官僚組織が健在であれば、政治の混乱期は安外経過出来ると信ずるものです」。

この短い言葉のなかに、支配階級の本能がすべていいあらわされていたのです。と同時に、国家権力とは何か、その本質と具体的あらわれが示されてありました。さらに、桜田氏は『日経連タイムス』（一九七七年元旦号）で、職場をおさえることが政治的安定をもちとするポイントだと、次のようにも述べていました。

「今後の日本は政治的にも、経済的にも、いままでもより不安定な状態になつていくことだけは、残念ながら間違いないように思うのですが、しかし、その不安定の中にあっても、職場を中心とした労使関係の安定を保つことができれば、それは社会全体の重要な安定帯となり得ることができると思うからであります。いま、わが国で雇用関係にある人たちは約三千七百万人、官公労を除いても約三千二百万人おります。その中で日経連会員関係の職場に働いておられる人は、一千万人を超えているわけですから、ここの労使関係を本当に安定させることができれば、われわれは日本の非常に大きな社会的安定帯を形づくっていくことができると思うものであります」。

さらにこんな発言が伝えられるといったようにです。

「これらの動きは社会党の成行きと重大な関係がある。総評のなかで共産党は日教組のような特定の組合には強い影響力をもつが、大勢としては大きな力はないから、総評新路線が定着するかどうかは、むしろ社会主義協会派の勢力がどれだけ後退するかにかかってくる。総評の柔軟路線の最大の抵抗力は協会派……といつてよい。（協会を後退させる）場はどこかにあるということになると、これは社会党に求める以外にはない。今春（一九七七年）の社会党大会で協会派は代議員の過半数をとった。先般の大会（第四一回大会）でもいぜん侮りがたいものを示した。そこで大会で協会派が少数になるような代議員構成にすることが、残る最大の懸案になってくる。つまり国会議員を代議員にしてしまえば協会派は少数になるということである。」

これが『旬刊 社会通信』創刊の頃の社会・経済・政治、そして総評・社会党をめぐる状況だったのです。（つづく）

◇読者からのおたより◇

真の沖縄連帯 ……私たちが辺野古や高江に行くのは具体的に工事を止めることと、マスコミが報じない沖縄の状況を本土に知ってもらう活動につなげるため、それ以上にここ京都から基地撤去の行動を盛り上げ具体的な闘いを実行していくための学習をし、決意を固めるためです。それが真の沖縄連帯であるといはつきりと自覚しています。

高江の星空は息をのむくらいきれいでした。ヤンバルの森はうつそうとして水を貯え、生き物の楽園でした。米軍基地を造るためにこの森が壊されていくことはなんという理不尽なことだろう、政府はこの国の人や自然を守る仕事をするべきなのに。

私は一時の高江行動でしたが、沖縄の反対住民の方たちは毎日、時には夜も徹して見守り抵抗の行動を続けているのです。それをいつも心に留め置きます。勇気と力をもらいます。（橋田秀美）